

「愛知県の重症心身障害児者の医療的ケアを考える」

事業報告書

独立行政法人福祉医療機構
平成 22 年度社会福祉振興助成事業

平成 23 年 3 月

医療・福祉・保健・教育のネットワーク名古屋
愛知県重症心身障害児者の医療的ケアを考えるシンポジウム実行委員会

はじめに

「医療・福祉・保健・教育のネットワーク名古屋」(ネットワーク名古屋)は、平成14年に、他分野の人々が協力して、重症心身障害児・者など重度の障害を持つ人たちが有意義な地域生活を保証されるようにすることを目的として設立しました。22年度までに17回の例会を開催し、そのうち5回は医療的ケアをテーマとして取り上げました。またネットワーク名古屋として、平成20年6月には名古屋市に対して「重心児・者の日中活動の場への看護師派遣制度の制定に関する提言」を、平成20年12月には厚生労働省に対して「非医療職の福祉職員による社会福祉施設等での医療的ケアの実施規制の緩和または特区申請規制緩和・特区申請」を行いました。

平成22年6月、重症心身障害児・者の地域生活について考える大規模のシンポジウムを企画したいと考え、ネットワーク名古屋の会員以外の愛知県内で重症心身障害児者への支援に関わっていらっしゃる方々にも呼びかけ、準備会を開催しました。その結果、独立行政法人福祉医療機構平成22年度社会福祉振興助成事業に、「重度障害者の医療的ケアを考える事業」で応募することになりました。8月に助成が決定したことを受けて、愛知県重症心身障害児者の医療的ケアを考えるシンポジウム実行委員会を結成しました。第1回の実行委員会を開催し、助成事業で愛知県内の障害児者の福祉施設(訪問系と非訪問系)にアンケート調査を実施すること、1月にシンポジウムを開催することを決めました。12月まで月1回開催した実行委員会とメーリングリストを活用し、アンケートの調査項目やシンポジウムの内容などについて検討してきました

平成22年7月に「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための制度の在り方に関する検討会」の第1回が開催され、非医療職による医療的ケアの実施が制度として認められる方向性が出てきました。そこで、その検討会の座長である愛知県大府市にある国立長寿医療研究センター総長の大島伸一先生にシンポジウムの基調講演をお願いしました。12月13日に検討会の中間まとめがとりまとめられ、シンポジウム開催日の1月9日は、検討会での議論のニュアンスや中間まとめの内容について説明していただくには、絶好のタイミングでした。

西宮市で30年間、重症心身障害の人たちの支援を実践されてきた清水明彦氏に、特別講演をお願いしました。「どんなに障害の重い方であっても、地域での暮らしは本人が生活の主体者であることが実現しなければまったく意味がない。そのことを実体化する仕組みこそが必要。」と熱くご自分の実践されてきたことや思いを語っていただきました。

シンポジウムのタイトルは、「愛知県の重症心身障害児者の方が、地域で安心して暮らせるためのシステム・制度の在り方」とし、コーディネーターは、愛知県心身障害者コロニー中央病院と豊田こども発達センターで長年、重症心身障害児者の医療に携わっ

てこられた三浦清邦先生にお願いしました。実践をされてこられたシンポジストの5人の方はどなたも、限られた時間で重症心身障害児者への支援について熱く語っていただきました。また、厚生労働省社会・援護局障害福祉部障害福祉課の土生栄二課長にもシンポジストとして発言していただくことができました。

参加者のアンケート結果からシンポジウムの内容全般についての満足度を紹介しますと、参加者数174名のうち回答者138名の結果が、満足89名(64%)、やや満足44名(32%)でした。また、自由記述の一部を以下に紹介します。

支援者対利用者ではなく人間対人間として関わる中で医療的ケアが必要であるといった講演内容にとっても感動し、福祉に関わる一人として、そういった思いを忘れたくないと感じた。

ご利用者様をよく理解したスタッフが“その人らしく生活してもらいたい”という思いからその実現のために医療的ケアを行なう必要がある、というお話を聞き、非医療職が行なっていく意義を理解できた。

国の最新動向、県内の状況や意欲的取り組み、実施する場合の留意点など、今まで全く見えていなかったことがみえてきて、医療的ケア実施への不安や抵抗感が軽減した。

多くの様々な立場の人が集結したこと、講師陣・参加者の熱意、一人ひとりの権利の実現を大切にする視点等から、大切なことをあきらめかけている自分にハッと、湧き上がるエネルギーや勇気をもらった。

看護師の指導をうけつつも不安を抱えて医療的ケアをした経験がある。福祉現場では介護士の立場は低く、介護者を主体に据えた議論はないため、看護師でありながら介護職の立場に立ち、介護職(=医療職の常識をもたない)への現状の指導・研修の問題点等を語るシンポジストの言葉にすくわれた。情報や考え方も共有できた場になり、良かった。

以上のように多くの参加者に満足していただけたシンポジウムとなりました。今回のシンポジウムが、愛知県の重症心身障害児者の地域生活の保証に向けた一助になったのではないかと考えます。

本事業報告書では、アンケート調査の集計結果とその分析、シンポジストの報告内容を掲載しました。圏域別、非訪問系の事業類型別の集計結果については、2011年5月から、ホームページ(<http://aichipmd.umin.jp>)で順次公開する予定です。

医療・福祉・保健・教育のネットワーク名古屋 代表 吉川雅博
(愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科)

愛知県の重症心身障害児者の医療的ケアを考える報告書

目 次

はじめに

部 アンケート調査

- 1 調査の概要 1
- 2 調査の結果 3

部 シンポジウム

- 1 シンポジウム「愛知県の重症心身障害児者の方が、地域で安心して暮らせるためのシステム・制度の在り方を考える」開催にあたって
豊田市こども発達センター小児神経科 三浦清邦 13
- 2 ひとりひとりが地域の中でいのちいっぱい生きる
～重症心身障がいを持つ仲間たちと共に創るいのちの拡がり～
愛光園理事 廣瀬治代 15
- 3 親はいま何をなすべきか
愛知県重症心身障害児（者）を守る会会長 松田昌久 18
- 4 日中活動の場における医療的ケアの取り組みと課題
社会福祉法人1980 生活支援員 足立 保 20
- 5 介護従事者による医療的ケアの研修への取り組み
～求められている現状と課題～
訪問介護事業所「心の泉」 代表取締役 中山恵子 23
- 6 障害者地域自立支援協議会の活用
～声をかたちに 相談支援専門員としての取り組み～
社会福祉法人アパティア福祉会 相談支援事業所シンシア豊川
相談支援専門員 牧野俊樹 25

- 資料1 訪問系事業所集計結果 30
- 資料2 非訪問系事業所集計結果 43
- 資料3 調査依頼文 55
- 資料4 アンケート調査票のご回答に当たって 57
- 資料5 訪問系事業所対象アンケート調査票 58
- 資料6 非訪問系事業所対象アンケート調査票 68